

バーナード・マラマッドの喜劇性

——近代リアリズムの一方法としての

彼の個性について——

新 美 澄 子

I. 序——マラマッドの世界

マラマッドの小説の中の人物には、時代離れした、古風な殉教者の風貌をそなえている者が多い。それはユダヤ的なものともいえるし、またロシア的なものでもあるという気がする。たしかに英国的なものではない¹⁾。アメリカの小説の中では、新しい傾向であるといえるし、アメリカの文化が、アメリカを形成している様々な民族的、宗教的な伝統の、混然とした合体であることを示す、新たな証拠ともいえる。社会学的な観点から言えば、ペローやマラマッド等のユダヤ系作家たちの活躍は、アメリカに関する文化的多元論（アメリカ社会は、WASP の規定する枠の中での同化を通じて形成されているのではなく、諸人種のそれぞれに独自の多様な文化の統一であるという考え方²⁾）を実証するような現象といえよう。

マラマッドの作品には、差別を受け、人生の不運に苦しむユダヤ人の姿がよく登場するが、人間受苦の象徴としてのユダヤ人というテーマ自体は、たいしてオリジナルな思想ではない³⁾。しかしマラマッドの場合、重要なのは、人間、苦難、運命といったものを描く際の彼の個性である。

マラマッドの個性について、ドストエフスキーとシャガールを思わせるものがあると述べた批評家がいるが、ロシア的でもあり、ユダヤ的であるという彼の性格を端的に表現した、適切な評といえる。短篇の *The Magic Barrel* (『魔法の樽』) や *Angel Levin* (『天使レヴィン』) のような幻想的な世界は、シュールリアリズム派のシャガールの絵が与える印象とよく似ている。マラマッドの場合は、シャガールの超現実的で夢のような世界が、ユダヤ人の苦難の歴史——ユダヤ人に対する様々な過去の影響、つまりアメリカへの移民、合衆国で

の差別、貧困、さらには昔のユダヤ人の殉教の歴史という背景まで——を、極彩色のヴェールで被い、一種、幻想的な印象を与えている。それは、冒頭で述べたように、奇妙に古風であるとともに、現代風な神秘性をも備えている。(マラマッドの作品に描かれる貧困には、全ての物が取り去られて、残るものはただ一つの机、椅子、戸棚といった、きわめて簡素な道具立てが持つ、古代的な蒼涼感がある。)

II. マラマッドの経歴

バーナード・マラマッドは 1914 年に、ニューヨーク市のブルックリンで生まれた。彼の両親はロシアから渡ってきたユダヤ系の移民であった。父親はブルックリンの場末で、小さな食料品店を営んでいたが、貧しかった。マラマッドはニューヨークの下町で少年期を過ごし、高校を出てからはニューヨーク市立大学に進み、さらにコロンビア大学の大学院に入学した。ただし、その間、生活のために高校の教師を続けていたので、修士号の学位を取得したのは 28 才の時である。31 才の時に、イタリア系の女性と結婚してからは、ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジに住み、夜間高校の教師をして暮した。その後、大学教師の資格を得た彼はオレゴン州立大学の講師になった。以来、作家と教師の二重生活を永く続けている。28 才の頃から短篇を書き始めたといわれているが、晩熟であったうえに、寡作な方で、高い文学的評価のわりに、作品の数は多くはない。

III. 代表作 *The Assistant* (『店員』)

1. モリス・ポーバというユダヤ人

The Assistant は、現在までのマラマッドの作品の中では、もっとも完成度の高い作品として評判が高い。この作品の主人公は、題名から判断すると、若いイタリア人のフランクということになるが、フランクが店員として仕えたユダヤ人の食料品商モリス・ポーバーが、作品の中で、もう一方の重要な役割を演じていることは疑いえない。モリスは 60 才をこえる、成功に見放されたロ

シア系のユダヤ人であるが、この老人のユダヤ人が、実は作品の精神的支柱となっているのである。

作品はモリスの1日の具体的な描写から始まっているが、そこは貧乏なユダヤ人が多く住んでいるマンハッタンのスラム街である。朝は夜明けと共に起き、夜は遅くまで店を開いても、お客は数える程にしか現われない。しかし身の不運を嘆きながらも、モリスは毎朝、未明に起きて、仕事に出かける貧しいポーランド人の女のために3セントのロールパンを売ってやる親切を1日も欠かしたことがなかった。また自分が破産寸前であるにもかかわらず、金の払えないアル中の女の子にはツケで売ってやる。しかしそうして1日に16時間も店を開いて働いても、彼はやっとその日の暮しができるといふ貧乏状態であった。彼には、足の悪い妻のアイダと1人娘のヘレンを養う義務もあった。

ある夜、彼が身を粉にしてもうけた1日分の稼ぎの10ドルを2人の強盗に奪われるという事件が起きる。極度に貧しい食料品店に2人もの強盗が押し入り、モリスをおどしたり、あちこち店の中を探しまわって盗んだ金⁵⁾が、わずかに10ドルというのは皮肉だし、読んでいて滑稽にさえ感じるのだが、もちろんモリスの側からすれば、これは不幸のどん底につき落とされたに等しかった。

... Morris saw the blow descend and felt sick of himself, of soured expectations, endless frustration, the years gone up in smoke, he could not begin to count how many. He had hoped for much in America and got little. And because of him Helen and Ida had less. He had defrauded them, he and the bloodsucking store.

He fell without a cry. The end fitted the day. It was his luck, others had better.⁶⁾

……モリスはその一撃が自分の頭に下りるのを見た時、自分がいやになった——辛い期待、果てしれぬ失望、煙と消えた幾年、自分では数えることもできぬ数々の不運。彼は多くの希望を持ってアメリカに来たのに、得たものは何もなかった。彼のせいでヘレンとアイダに貧乏暮らしをさせた。彼とこの生き血を吸う店が、あの2人を欺き、貧乏におとしたのだ。

彼は叫び声をあげずに倒れた。この結末はその日にふさわしかった。それが彼の運命なのだ。他の人たちは、もっとツイていた。

マラマツドはモリスの災難を、悲惨であると同時に、何だか馬鹿々々しいおかしさをもこめて描く。引用にある通り、何が起ったかを理解した時、モリスはとたんに自分がいやになった。なぜなら、馬鹿らしい程、不運なのが自分のいつもの運命であり、他人はいつもツイているからである。その夜の強盗も、もともとは成功した向いのユダヤ人の酒屋カーブの店に押し入る筈だったのだ。

モリスの災難が悲惨であると同時に、滑稽にも描かれているということは、人間の不幸が悲惨であると同時に、滑稽にもなりうるという矛盾した事実を、マラマツドが小説のリアリズムを通して表現しようとしたものである。

愚かしさと滑稽とは、必ずしも共通の幹から生えた枝ではないかもしれないが、モリスの不運が滑稽さによって多少、ゆるめられているとしたらそれは、モリスという人物をひたすら愚直に描いた作者の巧みな手法によるものである。合理精神につちかわれた近代人は、モリスの愚鈍さを笑うこともできるだろう。ユダヤ人モリスの極端な不運を、例外として片付け、無視することも可能だろう。なぜならモリスは不運でも、隣人のカーブや娘のボーイ・フレンドであるナット・パールという青年のように、世間的に成功した幸運なユダヤ人の例も存在するのだから。

しかしマラマツドの人物たちが、極端に悲惨であると同時に、滑稽にもみえるというのはいったいなぜだろうか。彼らが凡庸な人間であるがために、彼らの苦難が滑稽にみえるのだろうか。モリスの不運にはなぜか悲愴という形容はふさわしくない。主人公たちの不運と、彼らが不運に遭う時の奇妙な滑稽さの意味を理解することが、マラマツドの文学方法を解く一つの鍵である。

2. 表現の二重性

詳しいモリスの食料品店での苦勞が描かれたあと、強盗事件が起るわけだが、モリスは拳銃で頭をなぐられ、叫び声もあげずに倒れてしまうと、作者はそこで「この結末はモリスの1日にふさわしかった。これが彼の運だ、他人はもっとツイていた」と書き加える。この最後の2行で、モリスの不運は、悲惨の極から滑稽の極へと転換されるのである。つまり彼の苦難が哀れであると同時に愚かしく、不合理なおかしげなものに感じられる。この場合、滑稽は、彼の「落ちこんだ」客観的な状況について言うことができ、悲惨は彼の主観的なものに関わっている。

従って作者は明らかに、ここで二重の描定を行っていると言うことができる。モリスと1日つき合って、彼の商売の苦勞を充分に知っているはずの読者の眼

に、強盗に襲われて気を失っているモリスの姿が奇妙に滑稽に映るのは、作者が人物の状況を2重の立場から眺め、矛盾した2つの観点、つまり主観と客観の両方から表現しようとしているからである。言いかえれば、マラマッドは人間を矛盾として捕え、その矛盾を表現することに成功している。The Assistantにおけるマラマッドは、2つの措定を同時になす文学手方を確立していると言える。

モリスの人生の如く、苦しみはマラマッドにとっては、もっとも身近な作品の素材となった。しかし彼は人間の苦しみという素材に様々なニュアンスをつけ加える。厳斎なものと同時にグロテスクなものを、空想的な要素に古典的な性格をそえるといった具合に。そして彼がユダヤ人という一民族の運命を描く時には、その中に普遍的な人間の状況を暗示させようとしていることは言うまでもない。

しかしそれでは、どのようにしてマラマッドは矛盾した2つの措定を同時になすことができたのだろうか。モリスの不運は、なぜ悲惨であると同時に滑稽にもなりうるのだろうか。

‘But tell me why it is that the Jews suffer so damn much, Morris? It seems to me that they like to suffer, don’t they?’

‘Do you like to suffer? They suffer because they are Jews.’

‘That’s what I mean, they suffer more than they have to.’

‘If you live, you suffer. Some people suffer more, but not because they want. But I think if a Jew don’t suffer for the Law, he will suffer for nothing.’⁷⁾

「モリス、どうしてユダヤ人がこんなに苦しむのか教えてくれ、なんだか、ユダヤ人は苦しむのが好きなみたいだけど、そうじゃないかな？」

「あんたは苦しむのが好きかね？ 彼らはね、ユダヤ人であるがために苦しむのだよ」

「問題はそこなんだ。ユダヤ人は苦しむ必要がない時でさえ苦しんでいるみたいなんだ」

「生きているかぎり、人間は苦しむものなんだ。ある人々は他の人々よりもよけいに苦しむが、それは苦しむのを欲しているからではない。ただわたしが思うには、もしユダヤ人が律法を守る苦しみに耐えられないようなら、何一つ耐えられないということだ」

モリスのこの言葉は、フランクにそうであったように、モリス以外の人間には不可解である。律法のためであろうが、何のためであろうが、モリスの徹底した不運が、不合理なもの、滑稽なものに見えるという事実はどう否定しようもない。なぜ滑稽なのか。それはモリスの苦悩が無意味だからではないのか。苦悩が無意味であるというより、人間の存在そのものが無意味なのである。マラマッドの人間観も明らかに、現代的なニヒリズムから出発している。別の言い方をすれば、マラマッド文学の喜劇性は、人間の実存の滑稽そのものに根拠を置いていえると言うことができよう。現代のリアリズムが、滑稽と悲慘を自己の根拠としていることをも考え合わせれば、われわれがマラマッドの文学に深い親近感を覚えるのはごく当然のことと言える。つまりマラマッドは、現代人が人間を矛盾したものと捕え始めた時に、それを表現するのにふさわしい方法を持って登場した作家なのである。その点、彼はロシアの作家、チェホフにきわめて近い。マラマッドの手法がチェホフ的だと言われる理由は以上、述べた内容の中に見い出せる筈である。

マラマッドは、モリスの不運を無意味なものに感じさせるために、アイロニーを用いて、滑稽な姿に描いた。しかしこの時、モリスは同時に悲慘でもあるということが読者に伝わらなかったら、作品は文学として破綻をきたすことは明らかである。モリスの苦悩は滑稽であり、人は苦悩そのものに愛情を感じることはできないのに、なぜか苦しんでいるモリスには憐みを感じる。そしてモリスに対する同情から、まるで苦しみを愛しているように見えるモリスの生き方そのものまでを肯定したいような気持になる。しかし、その時読者は、実は、客観的な見方というものの放棄してしまい、専ら主観性へ没入した、いわば忘我の状態になっているのである。つまり、悲慘で滑稽なモリスの状況は見ずに、モリスという人間への愛だけを意識しているのである。このことは、主題であるフランクのユダヤ教徒への改宗と深い関係があるので述べた。そして、この点が、マラマッドとチェホフの大いに違っている所なのである。

ということは、文学方法においてマラマッドとチェホフは似ている（つまり人間や人間の運命を矛盾として捕えたという点に於て両者は共通点を持っている）が、窮極の立場はだいぶ異なっているのである。それは、チェホフは人間の矛盾の彼方へ自己を置くことによって「だから私には分らない」と言い放ち得たのに対し、マラマッドは少なくともこの *The Assistant* や *The Fixer* に於ては、歴史的背景を担ったユダヤ人の善良さに自己の文学的立場を賭けてし

まったと思えるからである。

一方、チエホフやマラマッドに共通するいま一つの性格は、たえず矛盾した2つの視点が置かれるために、人物のリアリティは増すが、作品の主題はそれだけ複雑で解りにくくなるという点である。マラマッドの場合も、*The Assistant* のような、まとまりのよい成功作でさえ、フランクの最期は果して充実した未来へつながっているのか、ヘレンとの愛は復活するのか、ちょっと解りにくいように書いてある。そのどちらとも決めかねるような曖昧さははらんでいるのだ。ヘレンとの恋愛にしても、そこには、もう未来はないと悲観的な解釈をする批評家もいるほどで、マラマッドの描き方は、けして単純ではない。しかし、ここは丹念に読めばすぐ解るように、フランクは自己の理想をやがて獲得するであろうという希望が暗示されているのである。後にまた述べるが、モリスの生涯についても、葬式での教導師(ラビ)の賛辞とは裏腹に、娘のヘレンの卒直な父親批判が並んで述べられたりしており、マラマッドはどこまでも、作中人物の誰かと自分を密着させるようなことを避けようとしている。

こういう訳で、マラマッドの見方が2重性を持つことは、彼の小説の肯定的な力を弱めるとも言えるが、この文学方法はあくまで作者が、矛盾を人間の実存の根拠としていることから生じた結果であるから、その限界は現代のリアリズムが持っている宿命的な限界と同質のものである。近代のリアリズムが、それ以前のリアリズムと違って、曖昧さと不徹底さを持つという事実にはそれなりの必然性がある。というのは、現代のリアリズムは、時間との直接的な関係の中で人間や世界を捕えるモーパッサン流の自然主義では、もはや人間の真実を表現し得ないことを承知しているのだ。モーパッサンの手法に於ては作品は破れていないし、作品の世界というものはつねに合理性によって保たれている。しかし、現代のリアリズムでは、人間を全体性に於て捕えようとする限り、表現は矛盾を含んだものになり、徹底さを欠いた曖昧な意味しか伝達できないのはやむをえぬ必然である。言いかえると、現代では、人間を矛盾したものにするばするほど、その表現は現代的なリアリティを増すのである。

3. モリスの倫理観

The Assistant の世界は、物質的には何の希望も見い出せない極貧の中で終始しているが、精神的には何か優れた高尚なものが感じられる。二律背反的な視点の構造はあるにしても、作品の精神的柱になっているユダヤ人のモリスの

倫理観は、作品にたえずほのかな光を投げかける燈台のような役割をしている。

ユダヤの律法に忠実であろうとするモリスの生き方が重要な意味を持つのは、主人公のフランクがモリスの生き方につよい影響を受けるからである。彼が嘔吐を催しそうな倒壊寸前のモリスの店に、ついに最後まで留まるのは、モリスに共鳴したからである。さらに物語の結びで、フランクは割礼の手術を受け、ユダヤ教徒に改宗してまでモリスの苦難の人生を引き継ぐことになる。

モリスは長年の苦しみによって、苦難をそのままに受け入れることのできる忍耐力を身につけていた。しかも彼は他人の苦しみを人一倍、共感できる能力も持っていた。「世の中が苦しんでいる。彼はそのあらゆる苦悩を一身に感じた⁸⁾」。フランクにユダヤ人とは何かと尋ねられた時、モリスは「善意を持ち、苦しみに耐える人間である⁹⁾」と答えている。

マラマッドは、苦悩をほとんど善と同一視しているように思われる所がある。少くとも、貧困や苦難に耐えるユダヤ人につよい愛着を感じていたことは確なようだ。しかもモリスの場合は、ユダヤ教の律法という、ヘブライ的な理想のために苦しむことを、人間の本来の生き方と考えているのである。だからモリスにとっては、ユダヤの律法のために苦しむ（つまり神の掟のために苦しむ）のでなければ、苦しみそのものが無意味になるのである。掟に「汝、盗むなかれ」とある限り、モリスは絶望的な状況に追いつめられた時でさえ、そそのかされた保険金目あての放火を実行に移すことができない。人生の悲哀や幻滅は、いわば彼にとって、空気のような存在になってしまった。「苦しみは何か品物みたいなものだ¹⁰⁾」とフランクは言う。「ユダヤ人ならきっとそれから一着の服が作れるだろう」

しかし、愚直ともいえるモリスは、妻や娘に辛酸をなめさせた自己の不遇を徒らに嘆くばかりで、困難な現実を切り開いていく処生の術も、实际的知恵も持ちあわせていないのである。見栄えのある店内にし、愛想をよくして店をもっと繁盛させようという商人らしい才覚さえ働かないのだった。

モリスが肺炎で死んだ時、ユダヤ教会の教導師（ラビ）は、葬式で彼の生涯についてこう弔辞を述べる。

“Yes, Morris Bober was to me a true Jew because he was true to the spirit of our life—to want for others that which he wants also for himself. He followed the Law which God gave to Moses on Sinai and told him to bring to the

people.....¹¹⁾

「ええ、私にとってはモリス・ホーバーはほんとうのユダヤ人でした。……彼はユダヤ人の人生の精神に忠実だったのです。すなわち、自分にしたいと願うことを他人にもしてやりたいという精神です。シナイの山上で神がモーゼに与えて、人民にもたらせと命じた律法、あれに彼は忠実だったのです。」

しかし同じ箇所で、作者は父を失った若い娘のヘレンにこう呟かせている。

「お父さんは人々に好かれていた。でもあんな店で一生を終る人を誰が尊敬するかしら？」¹²⁾

モリスは多くのものを期待してアメリカにやってきた。しかし小さな食料品店で21年間を費して、得たのは結局、1日に16時間も働いて、しかも食うや食わずの暮しかできない貧乏だけだった。老年に入ってからに彼に残されたものは、身にしみ入るような人生の苦しみを、ただ黙って受けいれ、その重みを耐え忍びながら生き続けることだけだった。

4. フランクの再生

人生の敗北者とも言えるモリスの生き方に若いフランクはなぜ共鳴するようになったのか。フランク・アルパインという人間は、凡庸の典型みたいな人間で、少くとも外面的には何の取柄もない。主人公とはいっても、それらしい強烈な個性とか特徴を持っている訳でもない。英雄型の主人公（ヒーロー）とは程遠い人物である。しかし作者はフランクの中に、平凡な青年が抱く未来への憧れや、現実の挫折感、異性に対する渴望、混沌とした苦悩や野望などを実に生き生きと描き込んでいる。フランクは一つの混沌であり、矛盾にみち、謎さえ秘めておりながら、同時にきわめてわれわれに近い、一人の平凡な青年として描かれている。、初めフランクは、教養もなく、人生に確とした目標もなく、街の与太者につき合うような、浮き草の人間として登場する。しかし、モリスの一家と生活を共にしているうちに、彼は知らず知らずにモリスの影響を受け、内面的に変化していく。フランクの再生がこの小説の第一の主題なのである。しかしながら、その再生の内容は、必ずしも単純で明白な解りやすいものではない。そこにこの小説の複雑さがあるような気がする。

この主人公は矛盾した、不思議な性格をいくつも持っている。幼児の時、両親に捨てられ、施設や他人の家庭にひきとられて辛い少年期を送ったというフランクは、いつか逆境を克服して、ひとかどの人物になろうと決心する。しかし満足な教育も受けない彼には、なかなか道は開かれない。ついにある時、彼は強盗をすることで、他人とは違う自分を発見できるだろうと考えた。しかし結局彼がしたことは、困難な事が起るたびに、それまでいた場所から逃げだすことだけだった。これまでの人生はそんな事の繰り返しだったのである。そのうち彼は一人の与太者と知り合いになり、ユダヤ人の酒屋を襲う計画をもちかけられる。その計画がうまく行かずに偶然、押し入った食品商が、貧しく善良なモリスの一家だった。モリスの1日分の稼ぎを相棒が取り上げた時、フランクは気絶しかけたモリスに水を汲んで飲ませてやる。その時、彼はそのコップをよくゆすいでから水を飲ましてやるような男であった。押し入り強盗をした翌日、モリス一家のことが気になったフランクは、こっそり様子を伺いに近くまでやって来る。コーヒー店に入り、そこから食品店を観察していた彼の目にふとテーブルの上の1冊の雑誌がとまる。そこにはアシジの聖フランシスの記事が載っている。

‘Every time I read about somebody like him I get a feeling
inside of me I have to fight to keep from crying.’¹³⁾

彼（聖フランシス）のような人の話を読むと、ばくはいつも感激して涙を押さえねばならなかった。

いったい前夜、強盗を犯した人間に、聖フランシスのさし絵が素直に美しく映るものなのだろうか。しかし不思議とマラマッドは、ここでのフランクの矛盾を不自然でないものに感じさせる。そうしてフランクが、やがてなぜ聖フランシスのような聖人につよく憧れるようになるのか、人間がなぜ立派な生涯に感動するのかを理解できるように、物語を書いていく。モリスの店で店員となったフランクは、一方でレジスターの小銭をごまかすような罪を犯しながら、一方ではモリス一家の救いの神として、フランシス聖人のように献身的に店のために働くのである。

やがて彼はモリスの一人娘のヘレンに恋するようになる。しかしヘレンは小規模な食品店で働く以外に能力のないような男に未来を任せる気にはなれない。だからフランクの恋は初め、完全な片思いであるが、そのうちにヘレンの方も

わずかではあるが、彼に惹き寄せられるようになる。それは一つには、フランク自身でも混沌として、よく解っていない彼の誠実さと、また言葉で説明するにはまだ曖昧な野心のようなもののためであった。しかしヘレンとフランクの恋愛には、障害になる条件がいくつかあった。まず、ヘレンは純粹のユダヤ人であるのに、フランクは異教徒であるから、両親は二人の結婚を絶対に認めないであろうということ、またヘレンは高い学問的な教養を重んじているのに、フランクにはたいした学歴もなく、知的な興味も乏しい人間であった。フランクに秘められた野心があるにしても、それはまだあまりに混沌としていて、ヘレンの昔の恋人である司法修習生のナット・パールのように、確実な出世は望めそうになかった。

フランクのヘレンに対する立場も複雑である。初めは反ユダヤ主義者であったフランクの人種的偏見は、ユダヤ人以外の人間、つまり異教徒(ゴイ)に対するモリスの妻アイダの根強い偏見、またモリスやヘレンの偏見と対応して描かれている。フランクがユダヤ人の一家であるモリスたちに無意識の優越感をもって、自分をその店の救済者であると感じたのと同様に、モリスたちにとって、フランクはどれ程、献身的ではあっても、所詮は、偉大なユダヤの神に選ばれた選民とは無関係の異邦人にすぎない。

こういう訳で、フランクのヘレンに対する愛は、不幸なことに彼の他の運命と同様に、いつも彼を愚弄するような形でしか展開しなかった。ヘレンに気に入られようと、本などあまり読まない彼が、せっせと図書館に通いだし、読んでいるうちに頭の痛くなるようなドストエフスキーを読み続けた努力の甲斐もなく、ある夜、2人の間は突然、破局を迎えてしまう。ヘレンを暴漢から救ったあとで、彼女の感謝の気持を誤解した彼は、強引にヘレンを抱いてしまう。ヘレンはその時、怒りにふるえる声でフランクを「割礼を受けていない犬!」とののしるのだった。

フランクはモリスの一家を救うために、朝早くから夜遅くまで働いていたのに、こずかい銭として店の金を少々くすねていたことが知られて、モリスに解雇されてしまう。それも彼が罪を告白しようと考えていた矢先のことだった。つぐないをしたあとで、自分がかつての強盗の片割れであることを告白してモリスに許してもらおうとした彼の願いも、結果は、モリスがすでにそれを知っていたことを教えられ、無駄になる。こうして、一時はボーバー一家の救済者であったフランクは彼らの敵になってしまう。しかし(これ以降、フランクの

信じられないような執拗な献身的努力が始まるのだが) フランクは何度、追い出されても廃業寸前のモリスの店へ戻ってきて、頼まれもせず、望まれもしないのに、食料品店を維持するために働き続ける。

フランクがモリスの貧しい店へ、それほど根強い執着を示すのは異常で、少し不自然な感じもする。モリスの人柄に惹かれたのは事実だが、一方でモリスのあまりの頑固さにあきれているし、ヘレンに対する愛情にしても、かなり純粋な深いものがあつたにしても、フランクの並々ならぬ献身を説明するには今一つ、不十分のような気がする。

フランクが聖フランシスのような聖人に憧れていたことは、すでに述べた。この聖人の常軌を逸した自己犠牲の生涯が、何かしらフランクの精神に強い影響を与えていたことも確かである。しかし、フランシスの生涯を模範とするのに、なぜボーバーの食料品店でなければならなかったのか。なぜ、ユダヤ人の不運な店を選んだのだろうか？ と、こう考えてくると、やはりフランクは聖フランシスという聖人に惹かれたというよりは、ユダヤ人という特定の人種の運命と関る方を重要視したのだと考えざるをえない。

物語は、フランクが四月のある朝、病院で割礼の手術を受け、正式にユダヤ人になる所で終っている。この結末が感動を与えるのはなぜだろうか。モリスの運命も、彼の努力も悲惨であるし、悲惨であるだけでなく、時には滑稽で、愚かしく見えるのに、どうして読者は、フランクがモリスの歩んだ道を継承することを肯認したくなるのであろうか。

5. ユダヤ人であること——存在の「根」としてのフランクの改宗

フランクのユダヤ教徒改宗について解釈を述べる前に、ここで筆者の個人的な体験を挿入することをお許しいただきたい。実はこの作品を読んだ直後に、たまたまニューヨークを訪れる機会に恵まれ、筆者はそこで直かにアメリカにいるユダヤ人数名にマラマッド文学について質問をする機会を得た。

何といっても人種の問題には外国人には解りにくい面が多いので、ニューヨークに居るユダヤ人のマラマッド観をぜひとも知りたかったのである。むしろ、筆者の遭遇したユダヤ人はごく限られた存在には違いない。しかしこの作品について、あるユダヤ人の老夫婦などは、作品の結尾で、イタリア系アメリカ人であったフランクが、ユダヤ教徒に改宗したことを、当時としては絶対、有りえない不自然な行為であると断言したのは意外だった。当時の厳しいユダヤ人差別

の社会に於ては、フランクのとった行為は不可能だというのである。この作品の結末に感動した筆者は、彼らの批評は初め納得いかなかった。が、その後アメリカで、さらにユダヤ人に関するいくつかの書物を探して読んだ後では、彼らの言葉がいささか解ったような気がした。その夫婦はともに 60 代で、ナチスの迫害も知り、ロシア系であることもモリスに共通しているのである。合衆国に於て、ユダヤ人として生きることを選ぶということは、日本人の想像を絶する複雑な問題を含んでいるとつよく感じた。

しかし別の機会に、こんどはある若いユダヤ人女性に会ったが、彼女が語った言葉もまた筆者の心に強く残った。彼女は 20 代の半ばで、ユダヤ人と結婚していたが、フランクの決断は彼女には充分、納得がいくし、あの結末はとても感動的だと語った。彼女の話を聞いているうちに、筆者は、フランクがなぜユダヤ教徒に改宗したかの、自分なりの解釈に到達した。フランクのユダヤ教徒への改宗は、彼が生きるための「根」(root)、換言すると、存在の証(アイデンティフィケーション)としての「根」を求めた結果なのである。

アメリカにいるユダヤ人の数は多い。ニューヨークにはことにイスラエル系の人が目につく。一世の特色は何といっても、WASP 中心のアメリカ社会に於ける彼らの疎外状況にあったし、その反動で、自分たちを疎外するアメリカ社会から自己の本来の姿を護ろうという戦いもあったのだ(その一つの例として、娘が異教徒と結婚するかもしれないなどとは夢にも想像できないモリス夫婦のように、彼らは自分たちがユダヤ人であることを一瞬にしろ、忘れることはできなかったのである。)

第二世代に於て、彼らはユダヤ人であることを自認するとともに、アメリカをも自分たちのものとして受け入れるようになった。ちょうどヘレンが、初めは異教徒のフランクに対して偏見を抱いていたのに、気持が傾いてくると、愛情さえ確かなら 2 人の結婚もありうると考えるに到ったように。当然のことながら、一世と二世の間には、考え方¹⁰に推移が見られるのである。

フランクはユダヤ人になることを選んだ。それは一世の時代には、あるいは不合理な、考えられない選択であったかもしれない。しかしフランクは二世、三世の世代に属している。彼の決断は、象徴的な行為といえよう。なぜなら、ユダヤ人であることと同時にアメリカ人になることをも受け入れようとした二世、三世の時代になると、彼らは一世の人々がつよく持っていたユダヤ人としての自覚を次第に失い始めたからである。しかも、彼らがその代りに同化しよ

うとしたアメリカ人というものには、彼らのアイデンティティを保証する確かな「根」はもはや存在しないということが分ってきたのである。つまり彼らはユダヤ人ばかりでなく、アメリカにもほんとうには属していないことに気がつき始めたのである。マラマッドの作品が若いユダヤ人たちにアピールしたとすれば、それは一つには、若きアメリカのユダヤ人たちが、再び自己のアイデンティティを、つまり root「根」を求めて、ユダヤ人の過去に眼を開き始めた、最近の状況に関係があるのだ。

IV. 他の作品との関連

1. *The First Seven Years* (『最初の七年間』)¹⁵⁾

フランクは、モリスが死んだあと、ヘレンと彼女の母親を養うために、食料品店を細々と続けていくのであるが、人の真似のできない自己犠牲の道を選んだフランクの姿は、受苦者としてのユダヤ人を象徴しているように見える。自己犠牲による魂の浄化、献身的な愛による再生という主題は、マラマッドの執着したテーマの一つで、他の作品にも、しばしば見い出される。たとえば優れた短篇集 *The Magic Barrel* の中の *The First Seven Years* や *Take Pity* (『われを憐め』) には、似たような主題が出てくる。*The First Seven Years* は、実は *The Assistant* の原型をなす作品である。靴屋のフェルドと頭の禿げた助手の年寄奉公人ソベルの師弟関係や、ソベルとフェルドの一人娘ミリアムの恋愛などは、後年の長篇 *The Assistant* に、そっくりそのまま持ち込まれている格好だ。主人公のソベルが嫉妬をする娘のボーイ・フレンドのマックスは、*The Assistant* ではヘレンのかつての恋人であった、ナット・パールに仕立て直された。*The Assistant* の plot の重要な部分はほとんどが、*The First Seven Years* の中に書き込まれているといっても過言ではない。そこで創作年代順としては逆になるが、*The First Seven Years* について、その構成と梗概を紹介してみたい。

この短篇の時代背景は、第2次大戦前夜で、場所はニューヨークのどこかである。マラマッドが育ったブルックリンの場末あたりかもしれない。ナチスを逃れてポーランドからアメリカに亡命してきた、苦労のため頭の禿げかけたソベルは靴屋の見習いをしている。同じポーランドから出てきた店主のフェルド

の店に徒弟として住みついてから、5年間はほとんど無給同様に働きつづけて、心臓の持病に苦しむフェルドを助けてきた。実はソベルは主人の一人娘のミリアムに秘かに恋をしていたのだ。ところが父のフェルドはソベルの助力に感謝しているものの、学歴もなく、頭の禿げた風采の上らぬ弟子に娘の将来を託す気には、とうていなれない。代りに、彼は近所に住む大学生マックスが勉強好きなのを見て、勝手に弁護士を目指す司法修習生と決めこんで、娘の結婚相手として白羽の矢を立てる。ところでソベルという人物、たいした学校教育を受けていない所はフランクと同じだが、大の読書好きで、暇さえあれば、狭いアパートの自室に閉じこもって本ばかり、それも古典を耽読している風変りな男ということになっている。*The Assistant* のヘレンの場合もそうであるが、学問とか教養を好む人物を多く登場させるのは、作者自身が小説家兼教師であり、知識階級の人間であるという理由だけではなく、学問をこの上なく尊び、学者を尊敬すると言われているユダヤ人の伝統とも何か関係がありそうだ。とまれ、マラマッドの小説には、専門の学者ではないにしても、たいへん読書好きの人物が少なくない。

結局、娘のミリアムは父親の勧めで、マックスと付き合うようになるが、2度会っただけで、相手が物質主義者にすぎないことが分ると、さっさと交際を止めてしまう。ミリアムはソルドの影響で本の虫になりかけている。何とか娘を何の望みもない頭の禿げた中年男の弟子から遠ざけようとしたフェルドは、ソルドが店に居られないように工作する。しかし彼の試みも失敗に終ると（娘もこの奇妙な男を愛し始めているらしいということが分ったので）フェルドは最後のお願いに「せめてあと2年ほど、そっとしておいてくれ、せめて娘が21になるまで」とソベルに頼むのだった。やっと許可が下りた翌朝、フェルドが店に行ってみると、そこにはすでに愛のために靴造りの仕事を再開した、ソベルの姿が見られた。

ここでは無力な店主が、弟子の働きに依存するという設定や、その弟子がいつの間にか店の金を一部ごまかしているのが分るという筋立てまで、*The Assistant* の構図は、*The First Seven Years* のそれにそっくりである。

2. *Take Pity* (『われを憐れめ』¹⁶⁾)

このほか、短篇の構想が長篇と重なり合う例として、*Take Pity* をあげることができる。未亡人になった女が夫のやっていた店を苦勞しながら経営してい

るのを見た男が、生活費を出してやろうとするが、どんなに熱心に援助を申し出ても、未亡人は頑としてそれを受けつけようとしない。与える側の男の熱意も執拗なのだが、それを拒む女の頑固さも徹底している。そこでその男は、ついにこう叫ぶ。「まったく妙なこともあるもんだ——何か与えようとしても、絶対に何もやれない人間がいるんだからな——しかし俺は与えるぞ」そうしてついに主人公の男は、自殺することで彼の真意を相手に伝えることに成功する。

信じられないような話だが、この作品には奇譚になりそうな幻想的なオチが隠されていて、そのオチが物語を急に次元の異なる世界に導くような仕組みになっている。全体を読んだ印象はシュールリアリズムの絵画を見るようで、意味は曖昧で複雑だが、作品に漂よう、深い憂愁のようなものが、つよく印象に残る作品である。

こうしたシュールリアリズム的手法は、とくにアメリカ文学では作者の主観が介入することにより、文学的破綻をきたすとして忌避されてきたものである。しかしマラマッドは、それを敢えて行って、イディッシュ的な民話的な素朴な文体と技法を充分に駆使して、寓話的な作品に象徴的な効果を盛り込むことに成功した。

Take Pity と *The Assistant* の共通点は、他人の苦悩の重荷を進んで身代りとして背負おうとする人物が両方の作品に出てくる点である。*The Assistant* の場合は、そうすることによって魂の浄化を得るという訳だが、イニシェイション（人生入門）の物語と解釈するにしても、マラマッドの人物がとる行為は、しばしば極端である。しかし、それにもかかわらず、そこに無理が感じられないのは、すでに述べたように、作者が主人公のそうした自己放棄の行為に感傷的に溺れてしまうことなく、客観的には、主人公の行為は、たとえそれがどんなに悲愴に見えようとも、やはり無意味であり、完成ということのありえない不条理な行為であることを、一方で暗示しているからである。苦しみにみちたユダヤ人の運命を選んだフランクの驚くべき最終の決断にしても（それは確かに物語の最後を華々しく飾るファンファーレのようにも見えるが）マラマッドはこう書き加えることを忘れてはいない。

One day in April Frank went to the hospital and had himself circumcised. For a couple of days he dragged himself around with a pain between his legs. The pain enraged and inspired him. After Passover he became a Jew.

四月のある日、フランクは病院へ行き、割礼の手術を受けた。二日ほど彼は股間に痛みを覚えながら、両脚を引きずって歩いた。その痛みは彼に激しい腹立ちと、勇み立つような気持を起こさせた。過ぎ越しの祭が過ぎると、彼はユダヤ人になった。

読者はこの箇所の現実に意味する内容の重さにショックを受けながらも、股間の痛みをこらえながら足をひきずって歩くフランクの不様な姿に、思わず苦笑しない訳にはいかない。マラマッドの目指した、二重の描定による全体性の確立という手法はここでは見事に成功している。

3. *The Fixer* (『便利屋』)¹⁸⁾

1958年の*The Fixer* (『便利屋』)はマラマッドが歴史とまともに取り組んだ初めての作品である。この作品ほどユダヤ人の迫害の歴史を直接に小説の背景に選んだ例はほかにない。そういう点でひじように特異な作品と言うことができる。時代は帝政末期のロシアである。便利屋のヤーコフ(主人公)は、ロシアに住むユダヤ人であったが、ある時、ロシア人の少年を殺害したという事実無根の嫌疑で投獄され、言語に絶する迫害を受ける。この事件は、実は政府が当時、国内に高まりつつあった、政府に対する不満を糊塗するために利用した陰謀の結果であった。ユダヤ人に無実の罪を着せることで、政府に対する不満の鉾先をユダヤ人への憎悪へと巧みにすりかえさせようとしたのである。その結果、たまたま選ばれたのが、名もない男のヤーコフであった。彼が牢獄の中からいくら無実を主張しても、検察側の追求は、かえってそのために厳しくなるばかりであった。しかしヤーコフは遂に苦難に耐えぬく。この作品は実際に起った事件をもとにして書かれたと言われているが、今までのマラマッドと違って、ユダヤ人としての自分の社会的、政治的意識を明確に提出している。ヤーコフは平凡な、とり立てて人に話す程の経歴も能力も持ち合わせていない男であるが(彼は結婚したが、子供の生めない女房に逃げられて以来、男としばらく暮して、その後一人で職を求めて旅立った孤独な男である)自分にふりかかってきた、極めて不条理な運命には、ついに屈しなかった。彼の長年の苦しみと黙々と耐え続ける忍耐力は、前年に書かれた*The Assistant*のユダヤ人モリスと共通するものがある。苦痛に耐え、鈍重だが、執拗に生きのびるモリスやヤーコフの姿には、怖しい底力さえ感じられる。たいして成功もしないが、か

いって、これといったひどい災難にも遭ったことのない、現代の青白い都会人たちが感じる人生の虚しさ、ニヒリスティックな心情とは、およそ縁遠い、苛烈な体験の持主が、マラマッドの凡庸な主人公たちなのである。

(1976. 9. 30)

註

- 1) Walter Allen, *Tradition and Dream: The English and American Novel from the Twenties to Our Time*, Dent, 1964, p. 332.
- 2) Norman Podhoretz, *Making It*, Robert Lantz-Candida Doradio Literary Agency, Inc., 1967, p. 357.
- 3) Harry T. Moore (ed.) *Contemporary American Novelists*, Southern Illinois University Press, 1964, p. 144.
- 4) Ihab Hassan, *Radical Innocence*, Princeton University Press, 1973, p. 161.
- 5) 岩元巖, 『現代のアメリカ小説』英潮社, 1974, p. 148.
- 6) Bernard Malamud, *The Assistant*, Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex, England, 1974, p. 28.
- 7) *ibid.*, p. 113.
- 8) *ibid.*, p. 10.
- 9) *ibid.*, p. 112.
- 10) *ibid.*, p. 204.
- 11) *ibid.*, p. 203.
- 12) *ibid.*, p. 204.
- 13) *ibid.*, p. 31.
- 14) Norman Podhoretz, *Making It*.
- 15) Bernard Malamud, "The First Seven Years," *The Magic Barrel*, New York: Vintage Books, 1958.
- 16) Bernard Malamud, "Take Pity," *The Magic Barrel*, New York: Vintage Books, 1958.
- 17) *The Assistant*, p. 217.
- 18) Bernard Malamud, *The Fixer*, New York: Farrar, Straus & Giroux, 1958.

その他の参考文献

Alfred Kazin, *Bright Book of Life, American Novelists and Storytellers from Hemingway to Mailer*, Boston, Little, Brown and Company, 1973.

小山田義文『アメリカ・ユダヤ系作家』, 評論社, 1976.

佐藤 健一『アメリカ・ユダヤ系作家論』, フタバ書店, 1975.

Leslie A. Field & Joyce W. Field (ed.): *Bernard Malamud and the Critics*, New York University Press, 1970.